



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	チェコ旅行者とアイヌ民族との出会い：イジー・ヴィクトル・ダネシの「太平洋を巡る三年間」の翻訳
Author(s)	フダー, クラース
Citation	北方人文研究, 18, 263-284
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94501
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_15_263-284_Chuda.pdf



[資料]

チェコ旅行者とアイヌ民族との出会い —イジー・ヴィクトル・ダネシの「太平洋を巡る三年間」の翻訳—

フダー クラーラ
(北海道大学大学院文学院)

1. はじめに

日本開国後、日本とオーストリア＝ハンガリーが初めて外交関係を始めた頃、チェコ社会は日本に大きな関心を寄せていた。1918年のチェコスロヴァキア建国から間のない頃も、チェコ人の日本旅行記は人気を博し、Barbora Markéta Eliášová（バルボラ・マルケタ・エリアーショヴァー）、Alois Svojsík（アロイス・スヴォイジーク）、Joe Hlouha（ヨエ・ホロウハ）といった旅行者は、チェコ人の日本への関心の高まりに大きく貢献した。（Vasiljevová 1989, 23）

チェコ人は、日本の人々や文化とともに、アイヌ民族の存在も認識していた。1860年に出版された最初のチェコの百科事典『Slovník naučný』には、アーダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルン（Adam Johann von Krusenstern）、ヴァシーリー・ゴロヴニーン（Vasily Golovnin）、アレクサンダー・ハバーシャム（Alexander Habersham）の旅行記が参考にされ、アイヌ民族について簡潔に述べられている。（Rieger 1868, pp. 79-80）その後、アイヌはチェコの大百科事典（例：Ottův slovník naučný 1888, pp. 543-545）や科学雑誌（例：Bauše 1902）に、より詳細な記述が定期的に掲載されるようになった。

チェコの旅行者は、東洋と西洋のさまざまな資料からアイヌについて学び、彼らの中には謎に包まれた日本先住民族に直接会いたいと願う者もいた。その一人が地理学者イジー・ヴィクトル・ダネシ（Jiří Viktor Daneš）であった。

本稿は、イジー・ヴィクトル・ダネシの『太平洋を巡る三年間』プラハ：ボロヴィ社、1926年（*Tři léta při Tichém oceáně*, Prague: Fr. Borový, 1926）の第27章「アイヌ人との出会い」（MEZI AINY）を翻訳するものである。

イジー・ヴィクトル・ダネシは1880年8月23日にオーストリア＝ハンガリー帝国で生まれ、1928年にアメリカ合衆国で死亡した。19歳の頃からヨーロッパを始め、北中南米、アフリカ、オーストラリア、アジアの国々を訪ねた。カルスト地形や社会経済地理学、政治地理学などの研究を行い、チェコの重要な地理学者の一人であった。1920年、シドニーで最初のチェコスロバキア領事になり、オーストラリアでの滞在の後、オーストラリアを出て、1923年に船で日本に上陸した（Martínek & Martínek 1998）。

東京を旅した後、夫人と一緒に北上し、仙台を經由して津軽海峡を渡り、船で北海道に向かった。北海道では、札幌を訪ね、ジョン・パチェラーのおかげで、アイヌ人の集落を訪問することができた。それは、ダネシの「生涯の夢のひとつ」だったと言われている。（Martínek & Martínek 1998, pp. 104）

ダネシは日本の旅行について豊かな記録を残した。白老と平取のアイヌ集落で一日しか過ごさなかったが、自分の体験と知識を詳しく記述した。訪問前にも、アイヌ民族に関する資料を手に入れたことが明らかである。少なくともバチューラーや、スコットランド人旅行家イザベラ・バードの旅行記をよく知っていたことは明らかである。ダネシは英語を流暢に話したが、アイヌ語はもちろん、日本語も全くできなかった。ダネシは英語の資料または日本人の通訳者に頼ることしかできなかった。アイヌの集落で一日しか過ごせなかったが、上記のように、当時のアイヌ民族に関する資料は西洋と東洋の文献が主であったため、ダネシもそれらに精通していた可能性は十分にある。

チェコはその過去の歴史から、特に西ヨーロッパとは異なる立場にあり、オーストリア＝ハンガリー、後のチェコスロバキアの一部であったチェコには植民地がなかったため、植民地主義的なイデオロギーとは無縁と考えられてきたが、実際はそうではなかった。実際、チェコの旅行者たちは西ヨーロッパ文化圏の一部であることを強く意識しており、東洋主義や植民地主義の影響を受けていたことについては詳しく述べられている (Lemmen 2013, Řičář 2023)。また、オーストリア＝ハンガリーの時代、日本に対しての好奇心が強かったが、日露戦争中、日本に対する否定的なイメージがメディアでよく見かけられ、しばしば「黄禍」のような人種差別的な表現が添えられていた (Vasiljevoá 1989, 43)。

ダネシの日本人に対する考え方、アイヌに対する考え方が、当時のヨーロッパの旅行者の考え方と一致していたことも明確であろう (Meli 2008, p. 12)。それと同時に、アイヌはコーカソイドであり、それゆえ日本人とは大きく異なるという考え方も当時は一般的であった (Refsing 2000, Fukuda 2015)。ダネシの記録もまた、この言説に従っており、ダネシの態度や考え方は、当時のヨーロッパ人としては典型的なもので、新味は少ないとも言える。しかし、チェコ人による直接の記録という点で、他に類似の資料が少ないと思われるので、ここに紹介することにする。今後、これまで注目されていなかった、さらなる資料の発見が望まれる。

本訳文は、原文の忠実な翻訳を目指したが、当時のアイヌに対する先入観が反映されており、現代の基準では不適切な内容が含まれている。そのような見解は、いかなる理由があろうとも決して許されるものではない。

参考文献

- Bauše, B. (1902). U „vlasatých Ainů“. *Vesmír: Obrázkový časopis pro šíření věd přírodních*, 16, 31–32. Available at: <https://ndk.cz/uuid/uuid:aa626200-6c4f-11e7-89ee-5ef3fc9ae867>
- Lemmen, S. (2013). Noncolonial Orientalism? Czech Travel Writing on Africa and Asia around 1918. In J. Hodgkinson, J. Walker, & S. Feichtinger (Eds.), *Deploying Orientalism in Culture and History: From Germany to Central and Eastern Europe*. (pp. 209–227). Boydell and Brewer. <https://doi.org/10.1515/9781571138828-013>
- Martínek, J., & Martínek, M. (1998). *Kdo byl kdo: naši cestovatelé a geografové*. (pp. 99–106). Praha: Libri.
- Meli, M. (2008). The “Savage” and “Gentle” Race: Isabella Bird on the Ainu. 英文学論集, 48, 11–26.
- Ottův slovník naučný: ilustrovaná encyklopaedie obecných vědomostí. Díl 1: A–Alpy. (1888). J. Otto. Available at: <https://ndk.cz/uuid/uuid:f3f1faa0-05a6-11e5-95ff-5ef3fc9bb22f>
- Řičář, J. (2023). Lovci a sběratelé: Čeští cestovatelé a praxe reprezentování lovu afrických zvířat v pozdním 19. století perspektivou animal studies. *Dějiny - Teorie - Kritika*, (1), 97–126. <https://>

doi.org/10.14712/24645370.3059

Rieger, F. L. (1860). *Slovník naučný*. Prague: Kober & Markgraf. Available at: <https://kramerius5.nkp.cz/uuid/uuid:eca80dd8-c6cf-415d-be7a-cffee97562d9>

Vasiljevoá, Z. (1989). Rozvoj poznání Japonska v českých zemích na přelomu 19. a 20. století. *Acta Universitatis Carolinae - Philologica* (1).

2. 日本語訳

第 27 章：アイヌ人との出会い

苦小牧の旅。イエゾ¹⁾の植民地化。普通電車でピラトリへ。アイヌの集落。ピラトリで一泊。
白老。アイヌ人の生活。

札幌周辺では東側でも科学的に管理された集中的な殖民活動が行われていたことがわかる。人口密度が高く、土地はほとんど湿地帯であり、利用されていない。この地域の農作物を加工するための工場や、近隣の森林から産出される木材も非常に豊富である。ホップやテンサイの栽培が導入され、順調に進んでいるそうである。日本のビールの中には、なかなか結構なものもあり、地元のホップだけで醸造され、モルトも日本の国産のものらしい。

排水路や灌漑水路はイエゾの大きな東部と西部を結ぶ広い平野を横断している。土壌は非常に肥沃だが、日本人の植民地化は期待ほどの速度で進歩していない。温暖な気候の南方で伝統的に慣行されてきた稲作は、この地で同じ収益性の高い方法で実践することはできない。異なる農業のやり方、そして生活全般に適応する必要がある。日本人は、寒くて厳しい気候に順応するのは非常に難しく、イエゾは比較的魅力的の少ない場所であることがわかった。米国を手本とした植民地が 1870 年代に始まったことを考えれば、他の日本列島の人口過剰を考慮すれば、イエゾの 200 万人の人口は相対的に小さいことがわかる。他の条件がすべて同じであれば、中国人もヨーロッパ人も、非常に価値のある多くの利点を提供する地域により愛着を抱いたに違いない。イエゾの入植を早め、日本列島の南部の過密状態を緩和するために、可能な限りのことをしてきた日本政府の責任ではない。新規入植者のために未開の土地を準備するために、これほど組織的な配慮をした政府はほとんどない。札幌農学校は、優秀なアメリカ人専門家によって設立され、アメリカ人専門家は日本人の専門家とともに、政府が費用を惜しまない仕事に精力を注ぐ数多くの優秀な専門家を育てた。

主な問題は、狭い面積での集中的な灌漑栽培に慣れており、注意深い園芸が二倍、三倍の収穫で報われる日本人は、長い冬が土壌の利用が制限され、特に最も温暖な地域でさえ満足のいく収穫はほとんどない米の栽培が妨げられる地域でのより大規模な農業には適応できないということだ。

日本人は、政府のどんな努力にもかかわらず、寒さに耐えやすい頑丈な家を建てることに慣れることができず、木炭を使った火鉢の代わりに建物を暖める適切なストーブを使おうともしない。南本土亜熱帯に近い気候と同じようにイエゾでも家と暖房を設置し、そしてその結果、苦しんでいる。

イエゾの面積は、ボヘミア、モラヴィア、我々のシレジアを合わせた面積と同じであり、人口はわずか 250 万人だ。日本人の中に良い入植者が十分な程度いれば、簡単にその三倍の人口を養うこ

1) 訳者注：イエゾ、チェコ語で「Jezo」とは、北海道のことを示している。

とができるようだ。

現在の日本の人口過剰の主な原因は気候である。イエゾもあり、サハリンもあり、朝鮮半島もあり、南満州もある。これらの土地は人口が比較的少なく、勤勉な農民に良い土地が豊富にある。しかしながら、不運なことに、日本の入植者は冬が長い国では繁栄せず、アジア大陸の乾燥した大陸性の霜に打ちのめされる。大戦後、日本軍がロシア沿岸部やアムール地方の占領をどれほど熱望し、どれほど不本意ながらそこから守備隊を撤退させたかはよく知られている。ただし、日本軍が撤退を余儀なくされたのは、ソ連の脅威やアメリカの抗議よりも、おそらく自軍の肺病や死亡率の方が原因だったはずだ。日本人は、湿度の高い海洋性気候に慣れ親しんだ島国人であり、伝統的な農法に従った農業が自分の国より優れた成果を発揮できる熱帯や亜熱帯地域に魅せられる。日本人の生活習慣を見ると、祖先のほとんどは、東インド諸島の沿岸地域に広がっていたマレー系人種と多くの点で関連している、南方から海路でやってきた人々であるということに違いない。日本の唯一の大植民地は、最も肥沃な地域に中国人が多く住んでいるフォルモサ（台湾）である。日本が開戦時に占領し、国際連盟の委任統治領となっている、元のドイツの植民地ミクロネシアは、小さな国土のために植民地化の余地はほとんどない。それゆえ日本人は、中国かどこかの植民地国家を犠牲にしない限り満たされることのない、土地への飽くなき渴望が残っている。最も近いのはフィリピン諸島だが、広範囲に及ぶ自治権を与えても、米国が何としても自国の影響下に置こうとするだろう。

日本政府は確かに、あらゆる戦争の衝突を避け、特に米国との決定的な争いを避けたいと強く願っているだろう。人口過剰問題の解決には、すでに日本が領有している領土に、移住を熱望する余剰人口を移住させる方がずっと有利だと確信している。実際、自国民の自然な傾向との非常に困難で、これまで成功していない戦いに取り組んでいるのだ。非常に寒いので、これまでの生活習慣を完全に変える必要があるイエゾやチョセン（朝鮮）、満州が気に入らないのだ。

多くの困難や挫折にもかかわらず、イエゾの植民活動の結果は素晴らしいものである。適切な植民者が選ばれば、必ず達成できる希望が十分あるであろう。南本土やキウシウ（九州）、四国から直接入植者を迎え入れるのは間違いである。それよりも、まったく異国の風土に突然飛び込んで衝撃を受けないように、より荒れた北本土の西部から、現地の状況に慣れやすい新しい入植者を探し、亜熱帯地域からの移住者と入れ替える方がよほど望ましい。昔から猟師と漁師の原始的な生活に完璧に適応したまばらにいるアイヌの小さな部族だけが住んでいた巨大な森林に覆われた最近まで知られていない地域に入り込む、島の北と東に伸びている鉄道が、岩見沢で札幌と室蘭を繋がる本線から分岐する。日本の開拓者の乱暴者たちは、アメリカやオーストラリアの白人入植者たちより良く原生林を管理したとは言えない。巨大な森林火災は、イエゾの熱帯雨林にも被害を与えているが、唯一違うのは、日本政府が少なくとも鉄道沿線で早急な再植林に努力をしていることだけである。

この地域の川は魚の豊かさで有名であり、秋にはサケの遡上は何千人もの人々の食料となる。沿岸の日本国民の食生活の重要な部分を形成している海藻やナマコ、食用軟体動物、カニとザリガニなどの漁獲を含める海洋漁業の中心地である沿岸の町では、魚の乾燥と熟成が非常に重要な産業である。イエゾの動物相は日本のとかなり異なり、日本のほうはもっと南方的で、すでにだいぶ減少している。北島に多く見られる強大なクマは、北米のグリズリーに非常に近く、その大きさと獰猛さでは負けていない。オオカミとキツネ、シカは多いが、サルと日本の南の島に多いキジはまったくいない。津軽海峡は何しろ生物地理学的に重要な境界である。なぜなら、その森林は南日本の森林とはかなり異なっており、アムール地方と非常に密接な関係があるからである。これは、気候条件だけでなく、異なる地質の発達の影響でもある。本土には、熱帯の群島や南中国との昔からの

繋がりを目指しす動植物の書類がまだ多く生息しているのに対し、イエゾは、サハリンやアムール地方、北米の自然とのつながりがより深い。

室蘭行きの本線は、ユヴァミザヴァ（岩見沢）から南の海岸近くの広く低い海沿いを南下している。苦小牧駅で列車を降りなければならず、サルフト（沙流太）行きのローカル線に乗り換えた。駅に着くところ、おそらく公式訪問を期待していた立派な制服を着た数人の紳士を見かけた。紳士のおもてなしが我々に提供されたことにとても驚いた。列車を降りるとすぐに駆け寄ってきて荷物を置き、何度もお辞儀をして自己紹介してくれた。警察の署長と駅長、当地区の学校検査官、そしてその他数人の小役人がいた。ただ一人の学校検査官は英語ができ、会話を仲介してくれた。なぜ突然こんなに注目されるようになったのか不思議でたまらなく、バチェラー氏は、助けてくれそうな場所の当局すべてに電報を打ったのだと説明された。

サルフト行きの列車は少し後に出発したので、制服姿のとても礼儀正しい紳士たちに付き添われながら駅周辺を歩いた。彼らはおそらく我々と同じようにこの公式の散歩を面白いと思ったのだろう。

サルフトへの線路は平坦な海岸沿いを走り、ところどころは直接、一部が落葉樹林一部が新しい森林に覆われた急だが高くはない坂を通り、今では漁業で貧しい生活を送る日本人がほとんど住む村々を通り過ぎる。川から離れた場所でも配水路によって灌漑ができるが、農業の成立は遅々と進んでいる。人工的な水路や熱心な植林は、日本の組織的な植民地化活動の大きな特徴であり、個人の私的な植民地化の努力がそれによって導かれている。

ここは、すでに荒野の端であった。サルフトは路線の終着駅で、やがてさらに南東に延長される予定だが、今のところは、一本のピラトリまでの短い支線しかない。再び、正装の警察の署長に待ち受けてもらって、ピラトリ行きの列車に荷物を移し替えてもらった。警察の署長は、我々と一緒にいてくれたが、会話が全く無理だった。英語がさっぱりできず、僕が英語を話そうとするのも理解できなかった。我々は散歩に行きたかったが、列車がいつ出発するのか誰も教えてくれなかった。機関車はすでに連結されており、なぜまだ待っているのかよくわからなかった。署長さんに、お互いに理解できないことを申し訳なく思っていることを伝えたかったので、会話集で非常に丁寧そうなフレーズを選んだが、署長さんはそれを誤解しただろう。すぐに何度も何度も会釈を返ししながら出ていき、列車が発車するまで外で待っていた。我々は、笑顔で彼を怒らせるつもりはないことを理解させようとしたが、本当の誤解を招くことを恐れたので、自分の気持ちを説明する言葉を探す勇氣はもうなかった。

日本語は、日本人の生活において細かく分類された儀式的計り知れない重要性を表現するのに完璧な手段である。細かい社会的分断は言葉にも表れ、さまざまな身分の人に対する話し方は非常に複雑で的確である。日本人の生活のあらゆる儀礼を学ぶには、果てしない忍耐と練習が必要であり、彼らの考え方や表現方法そのものが我々の考え方とは大きく異なるため、細かな相互理解やわかりあいは想像以上に難しい。

ピラトリにたどり着いたのは夕方、大雨の時であった。駅の周辺には日本人の集落があり、アイヌの村はもう少し離れている。現地の警察署長は、何度もお詫びをしながらその辺で最も良いヤドーヤ（宿屋）に泊めてくれたが、日本国内の非常に貧相なところと比べても非常に粗末なものだった。伝統的な装飾のない、まったく飾り気のない木造の小屋であり、本土の田舎にあるようなところであった。むき出しの木の壁は動かすことができなかった。これは我らにとって大きな利点だった。そうでなければ、四方八方から常に我らをじっと見つめる視線にさらされる場所だったから

だ。

その日の夕方、アイヌのピラトリまで散歩したかったが、我々の守護天使は午前中に連れて行くように命じられたらしい。熱心に暗闇と泥濘を指摘し、アイヌの村への夜の訪問は非常に不謹慎であることを身振り手振りで説明した。

ここピラトリでは初めて、日本では非常に普及している電気照明がなかった。行灯の明かりの下、畳の上に座っていた。煙の出る火鉢は、暖を取るためというより、苛立たせるもので、上着を着たにもかかわらず、肌寒さを感じた。日本人離れした顔立ちをした、奇妙なタイプの青年が我々の接客係に任命された。アイヌに似ている部分もあったが、鼻は完全にユダヤ系で、不安定な目の表情が日本人やアイヌ人よりも落ち着きのない血が混じっていることを示唆していた。夕食について合意するのに大変苦労した。我々は希望を伝えたが、まるで自分のおもてなしで啞然とさせると確信しているかのように、彼は聞き入れようとはしなかった。

しばらくすると、我々がオーストラリアで嫌というほど覚えたパンによく似た白いパンが12個ほど板に乗って運ばれてきた。彼が我々を完全に満足させることを望んでいただろうが、我々が言葉や身振りでさらに何か別のものを希望していることを説明したら、非常にながかりしていたらしい。そして、「ツッキ」、「ツッキ」と何度も繰り返しながら、とても熱心に何かを申し出ている。その意味を彼に説明せつめいさせようとしたが、彼は分からなかったし、悲しいことに我々も「ツッキ」が、英語で鶏、「chicken」つまりチキンであることを理解できなかった。最後には、札幌で買ったハムの残りを彼に渡し、名高いイギリス式に卵と一緒に炒めてくれるよう頼んだ。結局、ハムは冷めたまま返されたが、スクランブルエッグが添えられたので、美味しい日本酒で夕食を胃に洗い流しながら、お腹を満たした。

早朝、我々はアイヌの集落、旧ピラトリへ散歩に出かけた。遠目にも、アイヌの建物は日本家屋とは異なり、高い茅葺き屋根が精密な度合いで重ねられている。木と葦で造られ、正方形か長方形の形をしており、壁際は低く、暖炉の上の中央部は非常に高い。煙突はなく、家の中にあまりにも重なったら、屋根の穴から漏れ出す。細かい油性の煤は、アイヌ人によって非常に珍重され、タトゥーやその他の用途に使われている。

小屋に不規則に囲まれたやや小さな広場で、数人の先住民の女性と、巨大なひげと長い髪をなびかせた白髪のアイヌ男性に出会った。この男性は、我々の世話をしてくれる人として指定された。もしこの男が多彩な模様の着物のようなものを着ていなかったら、仙人かロシアの農夫と見間違えるだろう。それほどロシア人の中で異常に広まっている人類に酷似していたのだ。

この人の威厳に満ちた優雅な態度は、極めて沈着冷静な人物を相手にしているという印象をさらに強くした。彼の優しく表情豊かな目には聡明さが窺えた。これとは対照的に、自らの野蛮さを全く否定しない「未開人」であるところの、パプア人やメラネシア人の、文明の尺度から言えば決して高くない文化のことを何度も思い出させられたほどである。

警察ガイドがアイヌ老人に何を伝えたのかは分からないが、老人の程度は以前よりもさらに愛想よくなり、我々を自分の心に連れてき、たことを示すかのように威厳をもって何度も手を振り、そして、アイヌの習慣に従って友好と敬意を表すため、重々しく優しい表情で何度も自分の長い顎を撫でた。

家々の間を歩きながら我々に付き添い、最後に顎を撫でてたくさん歓迎しながら自分の家まで案内してくれた。小さな廊下を通り、日本の家屋のような畳で仕切られており、床が一段高くなっている部屋であった。老人は畳を開けてくれて中に入らせてもらった。小屋の真ん中には長方形の囲

炉裏があり、座席用のマットに囲まれている。囲炉裏の上にはやかんと道具がかけてある。東側から、大きな窓が隣接する一角に置かれた宝物を照らしている。背の高い、光沢のある漆塗りの器、形見の武器、日本の優れた職人技によるさまざまな装飾品、神聖な意味を持つ樹皮の剥がれた枝を持つ柳の棒などである。

隅には、囲炉裏の周りにまだ座っている人に家族が見えないように慎重にマットを敷いて寝る高さのある寝台が置かれる。アイヌの老人は、後で内に入ってきた奥さんと一緒に、マットの上に日本風に座り、凛々しい顔をした二人の写真を撮らせてくれた。残念ながら、女性の上唇にある、かなり繊細で美しい頬に奇妙な印象を与え、まるで醜い傷のような、太い口ひげの青いタトゥーは写真でははっきり見えない。二人と、もう一度、外で集合写真を撮影した。

宝物として高く評価されている日本由来の物は非常に古い時代の遺物であり、日本の領主が北海道のアイヌ民族と良好な関係を保ち、毛皮や鞣皮で作られた布の代価として、日本の工業製品を手に入れた時代のものである。

物品のほとんどは非常に古く、骨董品としての価値も大変高いのだが、アイヌ人は日本の有力な領主と良好な関係にあった先祖の貴重な遺物として、誰にも売りたいがらない。アイヌの伝承における偉大な勇者は、偉大な將軍の頼朝の弟である日本の英雄の義経（12世紀末）である。彼の勝利の一部を横取りした兄の怒りと嫉妬に倒れ、無法者として迫害されたが、イエズマでに逃れ、長年アイヌの間で暮らしたと言われている。アイヌの伝承によれば、義経にアイヌが文化を植え付けようとされ、文字や算数を教わったが、その後、日本の征服者の一人に本を取り上げられ、すべてが再び忘却の彼方へ消え去った。

外見は、アイヌはととても清潔で快い印象を与える。日本人によく邪魔になるありがちな押しつけがましい好奇心はなく、表情は穏やかで、むしろ沈鬱でさえあるが、意図的に仮面を剥いでいるように見える日本人よりも、はるかに知的でもある。

柔らかな樹皮から巧みに作られた、独特の茶色と青の模様で染められた生地は、非常に清潔に見える。男たちの長い髪やひげもきれいに手入れされており、おそらく服を脱いだり風呂に入ったりすることのない人々を見ているとは思えないほどだ。

日本人にとっては、アイヌ人は毛むくじゃらで不浄な野蛮人の妖怪であり、子供が怖がっており童話に登場する毛むくじゃらの巨人と同じようなものである。アイヌ人にとっては、他人の前で服を脱ぐことは大きな罪であるのに対し、知られている通り、日本人は、男女を問わず恥じることなく裸になる。

1878年にアイヌの村々を訪れ、多くの貴重な記録を持ち帰ったイザベラ・L・バード嬢は、ある日本人の女性が自分のアイヌ人女性の知り合いを招待し、風呂を用意したと語っている。しかしその女性は、裸では神々を怒らせると言って、服を着たまま水に入ったということである。

どの窓の前にも、壁の下端に立てかけている樹皮の枝をつけた棒が取り付けられており、外から窓越しに家の中を覗くことは、大変な侮辱と見なされる。アイヌ人のおもてなしは素晴らしく、非常に礼儀正しいバードさんは、何日もアイヌの人たちと一緒に過ごし、男女問わず彼らの礼儀正しさと遠慮深さを絶賛している。しかし、ヨーロッパ人にとっても日本人にとっても、アイヌの料理は食べられないものである。なぜなら、アイヌの料理が調理される釜も、それを食べる器も、きちんと洗われることがなく、食べ物はすべて反発を誘うのである。大鍋に臭いのする粗悪な脂肪とともにさまざまなものを入れると言われている。ヨーロッパ人にとってはまったく不愉快なものの、彼らにとってはまったく不愉快なものではない。

家の中には立派な熊の皮が見え、家のそばの柱にぶら下がった熊の頭蓋骨も見えたが、熊が飼われていた細い木の幹で頑丈に作られた木の檻は、おそらく長い間空っぽだったのだろう。植物界のヤナギと動物界のクマは、アイヌの宗教的儀式や伝説の中で最も大きな役割を担っており、それに関わる高位の神という認識である。

残念ながら、神々を祀る主な、そしてほとんど唯一の方法は酒を飲むことである。アイヌ人は、ずっと前から嘆かわしいほど酒に溺れてきた。確かに、この情熱的な飲酒を正当化する不幸な崇拝は、アイヌの衰退に大きな責任があるように思われる。稼いだ金を全部使って飲んでしまい、それ以外には、特に何も考えていないようだ。

つい最近までは、アイヌの村々では熊が飼われていた。子熊のときに捕獲され、女性たちによって肥育され、成長するまで檻に入れられ、最後には、盛大な儀式の際、多くの儀式とともに拷問されて殺された。熊の肉は参加者に食べ物として配られ、頭蓋骨には神として崇敬が払われた。

我々に付き添ってくれた一人の老人を除いて、男たちは村の外におり、おそらく森で狩りをしたり、漁をしたり、川で薪を運んだりしていたのだろう。女性と子供はかなりの数が見えた。残念ながら、母親と一緒に写真を撮ったとき、子供がそわそわしてしまい、写真が台無しになってしまった。

老人も、僕が撮影した女性たちも、見返りを受け取ろうとはしなかった。子供だけは、村の真ん中に家と店を構え、アイヌ人と結婚している日本人から買ったお菓子を受け取らせた。

若い落葉樹の森に覆われた丘には木製の階段のある道があり、神聖な鳥居という門を潜ると、上の森の中には、正式な神道信仰に加えて、アイヌの昔の儀式も行われている小さな神社がある。村のすぐ下には、上流の森から木材を下ろしてサルフトで捕獲する広い濁流が流れている。ピラトリの上方では、日本の農民が谷間の段々畑の土壌を教育するための広い灌漑用水路が分岐している。アイヌの人々にとって、この工夫はまだ無意味である。女性は最も原始的な方法で小さな畑を耕し、肥料も草取りもほとんどせず、雑草が生い茂り、あらゆる種類の雑草が生い茂り、非常に貧しい収穫しか得られない。主にヒエ、豆、ジャガイモ、さまざまな野菜を栽培している。

バード氏の訪問して半世紀近くも、そこのアイヌ人の生活はほとんど変わってこなかったようである。パチューラ牧師は、偉大な恩人でありアイヌの友人として各地で尊敬されているが、一緒に日本政府と一緒にアイヌの人口と道徳的衰退を止めるために全力を尽くしているのに、今のところ原住民の経済的向上にはほとんど効果がない。

最も美しい春の季節の幕開けの頃の、完全に冒険的な放浪へ誘ってくれた土地とアイヌの村との別れを惜しんだ。残念ながら、もう時間がなかった。その日の午前中は、乗り換えの時白老を見、宿泊するために登別に到着するため、帰りの列車に乗りなければならなかったのだ。

薄暗い日、列車でサルフトまで戻り、そこで苫小牧行きの路線に乗り換えた。そこで、再び公式の儀式が迅速に行われ、我々に同行していた2人の紳士、学校検査官と駅長が、苫小牧から室蘭方面に2駅行ったところにある漁師アイヌ人の村に、白老まで一緒に行くと申し出てくれた。白老には2つの集落があり、駅のそばには日本人町、そして、その近く、海沿いにはアイヌの集落がまばらに建っている。駅から、タルマエあるいはタルマイという巨大な火山の眺めが非常に綺麗だ。この火山はほとんど常に活動しており、特に強い噴火の際には、周囲を火山灰で覆い尽くすこともある。二重の円錐形をしており、真ん中の円錐形は幅が狭く背が高く、巨大な暗い森に覆われている下の円錐形から伸びている。時折、火口から大量の煙が立ち昇り、空中のさまざまな位置で向かい合う風に吹かれてゆっくりと消えていく。

アイヌ人の村へ案内してくれたのは、十分に意思疎通ができるほど原住民の言葉ができる学校検査官であった。まず、年老いた酋長が住んでいる大きな小屋を指さして、その酋長を呼び出して、かなり長い挨拶の儀式の後、儀礼服を着るように説得した。我々には、村長が見せてくれることに報いるため1円の報酬を与えるようにと英語で言った。

しばらくすると、老人が小屋の前に現れ、まるで東洋の教会の高位聖職者のようだった。白髪交じりの長い髪に赤いベレー帽をかぶり、白くて所々黄色がかった長い髭レンガ色の外套まで長引いていた。茶色と青の模様で飾られたアイヌの無地の着物を膝近くまで覆っていた。手には大きな弓を持っており、問題なく写真を撮らせてくれた。それ以外はきれいな顔立ちで、酒に酔った形跡があるだけだった。確かに、通訳者によると、アイヌの古くからの習慣に反して贈り物を喜んで受け取ってそれを酒に変え、神に敬意を表して飲むのが好きだった老人の唯一の希望は「酒」であった。彼の招待で広々とした小屋に入った。ピラトリで見た小屋と同じような内装だったが、宝物のために確保された一角はもっと豊かで、柳の枝もよりたくさん左右に垂れ下がっていた。

老人の村長は、誇らしげに実に美しい日本古来の刀剣や完璧な漆塗りの器を見せてくれた。そして囲炉裏の頭に座り、生贄を捧げて酒を飲む儀式を見せてくれた。深みのある漆塗りの碗を手に取り、その中に酒が入っていることを想像させた。自分の前に置いて、お辞儀をし、両手を丁重に振り、顎を撫でた。そして、ていねいに平滑に削られた定規のような平らな木製のものを手に取り、左手で碗を持ち上げ、神々に供え物を注ぐかのように厳粛で儀式的なやり方で木を動かした。そしてまたあごを撫で、定規で大きな口ひげを持ち上げ、いかに敬虔に、徹底的に飲むべきかを示すように、長い撫で方でお碗をひっくり返した。老人が喜んで枝やクマの毛皮、小屋の脇の杭に飾られたこの肉食獣の頭蓋骨などを見せてくれたため、我々は老人に期待していたよりも大きな報酬を与えた。

アイヌの白老の他の家は、村長の小屋よりも小さく、宝物が置いてある一角にも貴重品が少なかった。海で漁をしていたため、また村の男たちが見えなかった。村の向こうの海岸まで行き、そこには網を張るための高くて軽い棒が設置され、波立つ海がはるか遠くまで押し寄せても、船が流されないように陸に引き揚げられた船が固定されている強力なベグが打ち込まれた。

灰色の濁った波を覗き込み、アイヌが網で漁をしている船の遠くの暗い地点を探しながら、この平坦な不毛の海岸では、圧迫されるような寂寥感が我々を襲った。

森、火山、陰気で濁った海のなかの野生で素朴なアイヌの土地は奇妙で、悲しくても美しい。

帰っているところ、完成したばかりの小屋を通り、驚くべき光景を目にした。小屋の前では、四人の女性が壁を壁を飾る葦を真っ直ぐにしたり、染めたり、結んだりするのに夢中になっていた。ほとんど若者で、タトゥーをしている者は一人もいなかった。彼女の太陽の光と重労働で赤らんだ丸顔は、スロバキアの農婦に似ていた。

彼女たちを写真に収めたかったが、非常に強い抗議を受けた。我々の日本人案内人が急いで駆けつけ、しばらく彼らと交渉したが、どうやら彼女たちの雄弁な答えに非常に困惑しているようだった。もう一度尋ねられたとき、非常に回りくどく、この若い女性たちはすでに非常に堕落しており、恥知らずであるが、写真に立ち向かったら、一円ずつもらいたがっているということであった。

検査官がこの申し出もやりすぎだと思ったようだが、全員に一円以上を与えるつもりはないと伝えた。女性たちはしばらく非常に雄弁に本音を吐露していたが、私達が検査官の手に硬貨を押し、この報酬に満足しないのであれば立ち去ると描写的に示したら、小屋の前に立った。

残念ながら、このような場合にはたまにあることだが、非常に腹立たしいことに、写真の露出を

上げすぎてしまった。検査官は、アイヌの子供たちは学校でとてもよく勉強していると話し、模範的で温和な行動と善良な性格を褒めたが、男女を問わずほとんどすべての大人が実に有害で何の進歩ももたらさない程度にアルコール依存症に陥っていることに激怒した。

様々なアイヌの古い習慣は脇に置かれ、例えば若い女性たちはタトゥーを放置しているが、誰も神々のアルコール崇拝を根絶することはできない。ただ、アイヌ人の中には酒を飲まずその有害性を認識している人が少なくともいる。

アイヌ人は絶滅しつつあり、日本人と混血している。白老にはアイヌの妻を娶った日本人がたくさんおり、彼女たちにとっては、日本人と結婚することを名誉なことだと思っている。水嫌いを克服して風呂に入るために服を脱ぐかどうかは、残念ながら聞くのを忘れてしまった。

アイヌ民族は、ここまで、日本の文明の影響をほとんど受けておらず、古代と同じように、原始的な漁師であり狩猟民族である。その時代は、アイヌの近隣に、本土には数多く残されているが科学的にまだ確立されていない大型の土器を作る、謎の民族が侵略した前からのものである。

何千年もの間ここ北海道で、より進んだ日本人のような民族との、しばしばの直接的、長い間のかなりの友好的な交流が、アイヌ民族にほとんど影響を与えなかったというのは、実に不思議なことである。

自然な知性の欠如が原因であるはずもない。アイヌ民族は人類の中でも最も後進的な部類に入るのに、野蛮人という印象は与えない。人類学の研究によれば、頭蓋骨の形と脳の大きさは、他の原始的な種族とは非常に有利な違いがあることが証明されている。表情と習慣、社交マナーは、かなりの天性の知性を示している。

身体的特徴の多くは、アイヌ民族が我々白人の祖先とかなり近い関係にあることを裏付けている。日本人や、いわゆる黄人人類のほとんどよりも、確実に我々に近い。

日本人が、かつて敵対していた敵から反抗心や好戦的な態度をどうやって一掃したか、いまだに不可解である。現在のアイヌ人は、自分たちの運命に甘んじており、穏やかな苦難の民である。日本人や自分たちの信頼できる友人に対しては文句を言わないほど、日本人を恐れており、日本人との交流はほとんどなく、日本人の便利な発明を受け入れることもほとんどない。

この半世紀の間、日本人は、アイヌ民族に対して何ら危害を加えることなく、昔ながらの生活様式でアイヌの村に住まわせ、アイヌの部族自治を認め、キリスト教宣教師やその他の白人がアイヌと付き合う機会さえ進んで与えてきたのだ。

パチェラー牧師をアイヌの保護者と認識し、パチェラー牧師の助言に従っている。これほど興味深く、政治的に無害な部族を完全に消滅させることは文化的な不利益になると理解してきたからだ。

ただし、アイヌの人たちにとっては、自由に狩猟をする権利が制限されることだけは辛いことなのだ。日本の植民地化と森林の伐採は、最近までアイヌだけが知っていた地域の奥深くまで侵食しており、政府の規制によって、アイヌが自由に移動できる狩猟地は大幅に狭められた。毒矢を使った弩弓での狩猟とオオカミの穴での狩猟も、森を徘徊する林業家ために禁止されているため、アイヌ民族が最も愛する狩猟、特に熊狩りは、古来からの特性を奪われてしまった。

木、骨、鞣皮、皮革、毛皮で作られたアイヌの製品は模様の面で、アメリカ北西海岸や隣接する島々のいわゆるコロンブス・インディアン文化に似ており、ポリネシア人の作品と共通点が多いが、ポリネシアより多様性や際立った点はない。

社会組織もまた両者に比べて後進的で、より大きな単位で団結することができず、主導性を持たず、狩猟や漁労でも戦争でも、より精力的に協力するための組織を欠いていた。個人的には、驚く

べきことに、それ以外の行儀が非常に温和で緩やかな性格の民族の強さと勇気は今も優れている。

酒を飲むことに加え、日本人から、パイプや、最近は煙草を吸うことも学んだ。

干し魚や薫製魚、燻製の獣肉、特に熊や鹿、豆類、粟、ジャガイモ、野菜、そして貝類、軟体動物、食用海藻などの様々な海の幸は、アイヌ人の主食である。アイヌの女性は勤勉な働き者である。畑を耕すのが役目だが、畑はとても原始的なものだ。しかし、非常に綺麗で、丈夫な内皮の布を作り、料理をし、家事をする。

原則として、女性は宗教儀式や部族会議に参加することさえ許されず、非常に下位の立場に置かれている。男性の評議会で影響力のある発言力を持つことは稀な例外しかない。

一方、若者は結婚相手をかなり自由に選ぶことができると言われ、アイヌ人の妻は一般的に非常に貞淑な生活を送っていると賞賛されている。

我々は知ることになった部族の中では、一夫多妻制が例外であり、酋長は2人、あるいは3人の妻を持つこともあったが、それ以外、最初の妻に子供ができなかった場合のみ2人目の妻を娶っていた。

その他、特にアイヌの狩猟の部族では、一夫多妻制が一般的であった。なぜなら、猟師は森の中をさまざまな方向に放浪し、遠征の際に安全な場所を確保するため、数カ所に家族を構えたからだ。一緒になれば、一人の男性の妻たちの間に対抗意識はなく、とても友好的だった。

我々は、残念ながらあまりにもつかの間であったが、アイヌの村々への訪問に感動した。非常に気に入っている人々である。アイヌ人の柔らかな顔立ちはモンゴロイド人種とは全く違い、ロシア人のムジク²⁾に最も似ている。確かに、トルストイにとって、彼の忍耐強い信条に、これほど運命に身を任せる弟子を見つけることはできないだろう。我々は、アイヌの地を去るのを惜しんだ。この興味深い民の運命が尽きて、数世代のうちに、その独自性は消滅してしまうだろう。

アイヌ民族の過去数十年間の減少は、日本人を責めることはできない。残念ながら、生存競争に負けた弱い精神は滅びて絶えてしまうのは、世界の自然な流れなのである。この場合も同様だ。

近年もアイヌ人の数は急激に減少しており、その純血人の数は、全エヴにわずか一万五千人しかないと言われている。

3. チェコ語の原文

XXVII MEZI AINŮ

*Cestou do Tomakomai. Kolonisace na Jezu. Po lokálkách do Piratori
Osada Ainů. Nocleh v Piratori. Širaoi. Život Ainů.*

Okolí Sappora prozrazuje i po východní straně hodně daleko intenzivní, vědecky řízenou kolonizační činnost. Je hustě zalidněno, málo půdy, jen močálovitě, zůstává nezužitková no a také průmyslové závody na zpracování plodin kraje i dříví z nedalekých lesů jsou tu velmi hojné. Zavádí se kultura chmele a řepy cukrovky, prý s dobrým úspěchem. Některá japonská piva nám docela dobře chutnala, jsou prý vařena snad úplně ze zdejší odrůdy chmele, a také slad je domácí, japonské

2) 訳者注：“mužik”および“mužik”；ロシア語で мужик、ロシア帝国時代の農夫を指している。

výroby.

Zavodňovací a odvodňovací průplavy a strouhy protínají širokou nížinu, která spojuje veliký východní trup ostrova Jezo se západní jeho částí. Půda její je velmi úrodná, ale kolonisace Japonců nejde před se tak rychle, jak by se dalo čekat. Pěstování rýže, podle způsobu tradicí posvěceného dále na jihu v teplejším podnebí, nelze tu provozovat stejně výhodně, třeba se přizpůsobovat na jiný způsob hospodaření, a na jiný způsob života vůbec. Ukazuje se, že Japonci velmi nesnadno se aklimatisují v chladném, drsném podnebí, že Jezo má pro ně poměrně malou přitažlivost.

Povážíme-li, že s kolonizací podle amerického vzoru začalo se tu již v létech sedmdesátých, shledáme, že při přelidnění ostatních japonských ostrovů je počet dvou milionů obyvatelů na Jezu poměrně nepatrný. Není pochyby, že za stejných jinak podmínek by Číňané a také Evropané byli více přilnuli k zemi poskytující mnoho velmi cenných výhod.

Není to nikterak vinou japonské vlády, která vskutku činila a činí vše možné, aby osídlení Jeza uspěla, a ulevila tak přelidnění v jižní části souostroví.

Málokterá vláda vynaložila tolik soustavné péče na přípravu svých panenských oblastí pro nové usedlíky. Sapporská zemědělská škola byla založena vynikajícími americkými odborníky, kteří se svými japonskými spolu pracovníky vychovali celou řadu znamenitých specialistů, věnujících své síly dílu, na něž vláda nelitovala peněz.

Hlavní potíží je v tom, že Japonec zvyklý intenzivní kultuře zavodňovací na malých plochách, které dvojí ba i trojí sklízí odmění jeho piplavou zahradnickou péčí, nedovede se přizpůsobiti extensivnějšímu hospodaření v zemi, kde dlouhá zima omezuje využitkování půdy a zejména brání mu v pěstování rýže, která i v nejmírnějších oblastech Jeza dává jen málo uspokojující sklízň.

Japonci nemohou si přes všechnu snahu vlády, která ve všem jim jde vstříc, zvyknouti, aby stavěli pevnější domy, v nichž snáze se vzdoruje zimě, a nechť ani své hibači s dřevěným uhlím vyměnit za pořádná kamna, která by jim vyhřívala stavení. Staví si domy a topí zde na Jezu právě tak jako skoro v subtropickém podnebí na jižním Hondu, a následkem toho strádají.

Jezo zaujímá stejnou plochu jako Čechy, Morava a naše Slezsko dohromady a má sotva dva a půl milionu obyvatelů; zdá se, že snadno by mohl uživiti i třikráte tolik, kdyby jen se našel mezi Japonci dobrý typ kolonistů v dostatečném počtu.

V podnebných poměrech je hlavní příčina dnešní přelidněnosti Japonska. Má Jezo, má Sachalin, velký poloostrov Koreu, ano i Jižní Mandžusko, vesměs země, které jsou poměrně málo zalidněné a poskytly by hojnost dobré půdy pro pracovitě zemědělce. Ma neštěstí však japonským kolonistům nedaří se v zemích s dlouhou zimou a zejména suché kontinentální mrazy na pevnině asijské je přímo ubíjeji.

Je známo, jak rádi by Japonci byli zaujali přímořské a amurské oblasti ruské po světové válce, a jak neochotně stahovali odtamtud své posádky, ale je jisto, že k ústupu přinutily je snad více plicní nemoci a úmrtnost ve vlastním vojsku, nežli ohrožování se strany Sovětů nebo protesty americké.

Japonec je prostě ostrovan zvyklý na vlhké oceánské podnebí, jeho lákají tropické a subtropické oblasti, kde může provozovati zemědělství podle svých tradičních method ještě s lepším výsledkem, nežli ve své vlasti. Jeho životní zvyklosti ukazují, že zajisté z největší částí je potomkem obyvatelstva, které přišlo po moři od jihu a bylo v mnohém příbuzné těm typům

malajského plemene, které rozhostily se po pobřežních oblastech východo indického archipel.

Jediná větší država japonská v tom směru je ovšem Formosa čili Taivan, ostrov hojně zalidněný Čínany ve svých neplodnějších oblastech. Německá država v Mikronésii, kterou Japonsko obsadilo počátkem války a má v držení jakožto mandátové území Společnosti Národů, poskytuje jen nepatrné možnosti pro kolonizaci svou nepatrnou rozlohou. Proto zůstává u Japonců stálá nenasycenost, hlad po půdě, jehož nelze ukojit, než na úkor Číny nebo některého koloniálního státu. Nejblíže na ráně jsou Filipínské ostrovy, které ovšem Spojené Státy Americké budou se snažiti udržeti stůj co stůj pod svým vlivem, třeba jim daly dalekosáhlou samosprávu.

Japonská vláda zajisté velmi ráda by se vyhnula všem válečným srážkám a zejména varuje se před rozhodným bojem se Spojenými Státy jsouc přesvědčena, že mnohem výhodnějším řešením problému přelidnění bylo by osídlení oněch končin, které Japonsko již má ve svém držení, přebytkem obyvatelstva toužícího se vystěhovati. Podniká tu vlastně velmi namáhavý a dosud málo úspěšný boj s přirozenými sklony svého vlastního lidu, kterému prostě ani Jezo ani Čosen (Korea) ani Mandžusko se nelíbí, protože jsou tuze studené a vyžadují úplnou změnu dosavadních životních zvyklostí.

Přes všechny potíže a nezdary jsou výsledky kolonizační práce na Jezu podivuhodné, a opravňují naději, že povedou k cíli, bude-li vybírán pravý typ kolonistů. Bylo by chybou přiváděti sem osadníky přímo z jižního Honda, z Kiušiu nebo Šikoku, nýbrž daleko spíše se doporučuje, hledati nové usedlíky zejména ze západní drsnější části severního Honda, kteří spíše si ve zdejších poměrech zvykají a na jejich místo dávati vystěhovalce ze subtropických končin, aby skok do úplně cizího podnebí nebyl tak příliš náhlý.

V Ivamizavě odbočuje od hlavní trati, vedoucí ze Sappora do Muro- ranu, železnice rozvětvující se na sever i na východ ostrova, pronikající oblastmi do nedávna skoro neznámými, pokrytými mohutnými hvozdy, které byly obývány jen řídkými a drobnými kmeny Ainů, od věků dokonale přizpůsobenými primitivnímu životu lovců a rybářů. Divoká chasa průkopníků japonských nehosподаří s původními pralesy o nic lépe, nežli bílí kolonisté v Americe nebo v Austrálii, obrovské lesní požáry jsou metlou pralesové oblasti také na Hokkaidu a rozdíl je jen v tom, že vláda japonská vynakládá mnoho péče na rychlé znovuzalesňování země aspoň v okolí železničních tratí.

Řeky této části ostrova jsou proslulé svou rybnatostí, na podzim tah lososů poskytuje výživu tisícům lidí a sušení i nakládání ryb je velmi důležitým průmyslem v přímořských městech, která jsou též východisky významného rybolovu mořského, zahrnujícího též lov krabů a raků, jedlých měkkýšů, holothurií i chaluh tvořících značnou část potravy přímořské ho obyvatelstva japonského.

Zvířena na Jezu liší se do značné míry od japonské, která má mnohem jižnější ráz a je již valně ochuzena. Mohutný medvěd, hojný na severním ostrově, je velmi blízký severoamerickému grizzly a rovná se mu mohutností i zuřivostí, vlků, lišek i jelenů je tu hojnost, za to však chybí opice úplně a také bažanti hojní na jižních ostrovech japonských. Tsugarská úžina je vůbec důležitou přehradou v ohledu biogeografickém, neboť také lesy zdejší mají zcela odlišný ráz od lesů jihojaponských a jsou namnoze příbuzné amurské oblasti.

Není to jen účinkem podnebných poměrů, nýbrž též rozličného geologického vývoje; kdežto ještě na Hondu žije mnoho druhů rostlin i zvířat, které poukazují na dávné spojení s tropickými

archipely a s jižní Čínou, Jezo má mnohem více vztahů k přírodě Sachalinu, amurské oblasti i k severní Americe.

Hlavní trať do Muroranu vede od Jvamizavy k jihu širokou, nízkou šíjí již poblíže jižního pobřeží.

Na stanici Tomakomai bylo nám opustiti vlak a přestoupili na lokální železnici do Sarufuto. Dojíždějíce do stanice viděli jsme tu několik pánů v parádních uniformách, kteří patrně čekali úřední návštěvu. Byli jsme velmi překvapeni, že jejich pohotovost platila nám; přihnuli se k nám, jakmile jsme vystoupili z vlaku, dali snést naše zavazadla a představili se nám s mnoha úklonami. Byl tu policejní prefekt, přednosta stanice, okresní inspektor školní a ještě několik menších hodnostářů. Jediný školní inspektor uměl trochu anglicky a zprostředkoval konversaci. Byli jsme plni údivu, proč najednou dostává se nám tolik pozornosti a dostalo se nám vysvětlení, že Mr. Batchelor telegraficky upozornil všechny úřady v místech, kde bychom snad mohli potřebovali jejich pomoci.

Jelikož vlak do Sarufuta odjížděl o něco později, prošli jsme se po okolí stanice stále provázeni velmi uctivými pány v uniformách, kterým snad tato úřední procházka byla stejně komická jako nám.

Trať do Sarufuto vede po plochem pobřeží, místy přímo pod úpatím příkrých, ale nevysokých, z části listnatým lesem pokrytých, z části nově zalesněných svahů, a míjí vesnice dnes převahou jen Japonci obývané, kteří živí se dosti nuzně rybářstvím. Zemědělství se tu uchycuje pomalu, ač rozváděcí strouhy umožňují zavodňování i daleko od řek. Umělé vodní toky a pilné zalesňování jsou rázovité vlastnosti soustavné japonské práce kolonizační, která předchází a vede soukromou iniciativu jednotlivců.

Byli jsme tu již na okraji divočiny. Sarufuto byla poslední stanice dráhy, která časem má býti prodloužena dále k jihovýchodu, prozatím však vysílá jen jedinou krátkou odbočku do Piratori. Očekával nás tu policejní komisař zase v plné parádě, dal přenést naše zavazadla do vláčku určeného do Pi ratori a zůstal stále s námi, ačkoliv konversace byla absolutně nemožná. Anglicky neznal vůbec a mým pokusům dohovoreti se japonsky nerozuměl. Byli bychom rádi chtěli se projít, ale nikdo nedovedl nám říci, kdy již vlak odjede; lokomotiva byla již připjata a nevěděli jsme opravdu, proč ještě čekáme.

Chtěl jsem milému komisaři naznačiti, jak je nám velmi líto, že si navzájem nerozumíme, a vybral jsem si v konverzační knížce velmi slušně znějící frási, které však ten dobrý muž patrně špatně porozuměl, neboť ihned se odporoučel s mnohými poklonami a vyčkával venku až do odjezdu vlaku. Hleděli jsme mu svými úsměvy dáti na srozuměnou, že neměli jsme naprosto v úmyslu ho urazit, ale už jsem se neodvážil hledati fráse, kterou bych mu naše city vysvětlil, ze strachu, abych nezpůsobil snad opravdové nedorozumění.

Japonština je dokonalým nástrojem k vyjádření nesmírné důležitosti jakou jemně odstupňovaná obřadnost má v životě japonského národa. Podrobné společenské rozčlenění došlo svého výrazu též v řeči, a způsob, jak osloviti osoby rozmanitých stavů, je nesmírně složitý a přesně vyhraněný. Naučiti se všem formálnostem japonského života vyžaduje nekonečné trpělivosti a praxe, při tom zároveň jsou jejich způsob vyjádřování myšlenek a myšlení samo velmi rozdílné od naší mentality a

proto podrobnější dorozumění a vzájemné pochopení jsou mnohem těžší, nežli si představujeme.

Do Piratori dojeli jsme až za soumraku a po velkém dešti. Kolem nádraží prostírá se japonská osada, kdežto vesnice Ainů je opodál. Místní náčelník policie umístil nás s mnohými omluvami v nejlepší zdejší jadóji, která však byla velmi primitivní i ve srovnání s hodně chudými v Japonsku samém. Byla to zcela neozdobná dřevěná chata s pokojíky, které postrádaly úplně tradiční ozdobnosti, jakou najdete prý i v posledních vesnicích na Hondu. Holé dřevěné stěny nedaly se posunovati; to byla ovšem velká výhoda pro nás, neboť jinak bychom se byli stále setkávali s očima zevlujícíma na nás se všech stran.

Chtěli jsme ještě toho večera projít se do ainského Piratori, ale náš strážní anděl měl patrně rozkaz, aby nás tam teprve ráno doprovodil a s velkou horlivostí poukazoval na tmou a bláto, dáváje mimicky na srozuměnou, že večerní návštěva vesnice Ainů by byla velmi nevhodná.

Zde v Piratori po prvé neměli jsme elektrického osvětlení, které jest jinak v Japonsku rozšířeno nesmírně. Seděli jsme na rohoži při světle lucerny. Čmoudivé hibači bylo spíše pro zlost nežli pro oteplení a cítili jsme sychravo, přes to, že oblékli jsme své pláště. K obsluze naší byl určen mladík podivného typu, jistě míšenec, tváře docela nejaponské; něčím připomínal na Ainu, ale nos měl zcela židovský a také těkavý výraz očí svědčil na přimíšení nepokojnější krve, nežli je japonská nebo ainská. Měli jsme velikou potíž dohodnouti se s ním o večeři. Vykládali jsme mu svá přání, kterých on jaksi nedbal, jako by byl přesvědčen, že nás omráčí svou pohotovostí.

Za hodnou chvíli dal vnést na prkně asi tucet bochníků bílého houskového chleba, velmi podobných těm, které jsme se v Austrálii naučili skoro nenáviděli. Doufal, že budeme naprosto uspokojeni a byl velmi zklamán, když vysvětlovali jsme mu slovy i posušky, že bychom rádi ještě něco jiného. Pak jal se nám velmi důrazně nabízet něco, opakuje stále »cki«, »cki«. Snažili jsme se přimět ho k tomu, aby ukázal, co asi tím myslí, ale on nedovedl toho pochopiti, a my zase k své žalosti také jsme se nedovtipili, že »cki« má býti »chicken« (čikin), anglicky kuře. Konečně odevzdali jsme mu zbytky šunky koupené v Sapporu a žádali, aby je dal opéci s vejci po anglickém známém způsobu. Nakonec však vrátili nám sice šunku studenou, ale položili k ní vejce míchaná, takže jsme se jakž takž nasýtili, zapíjejíce večeři dobrým sake.

Brzo ráno vydali jsme se na procházku do osady Ainů, starého Piratori. Stavení Ainů liší se již z dálky od domů japonských svými vysokými doškovými střechami, které jsou navrstveny ve velmi přesných stupních. Jsou vystavěna ze dřeva a rákosí v půdorysu čtverečném nebo obdélníkovém, při stěnách jsou nízká, uprostřed nad ohništěm však hodně vysoká, nemají komínů, nýbrž kouř uchází otvory ve střeše, když se byl hodně rozptýlil po vnitřku domu. Jemné mastné saze jsou u Ainů ve vážnosti, používá se jich při tetování i k jiným účelům.

Potkali jsme na malém prostranství, dosti nepravidelně chatami obklopeném, několik žen domorodých a jednoho prošedivělého Ainu s mohutným vousem a dlouhým splývavým vlasem, kterého nám náš průvodce označil jako někoho, ke komu se máme obrátiti. Kdyby tento muž nebyl oblečen v jakési kimono s pestrým vzorcem, byli bychom ho pokládali za nějakého poustevníka nebo starého mužika ruského, tak blízka byla jeho podoba s typem mezi Rusy neobyčejně rozšířeným. Důstojné a laskavé jeho chování zvyšovalo ještě dojem, že máme co činiti s člověkem neobyčejně vyrovnané povahy, jeho laskavé, výrazné oči hleděly tak inteligentně, že musili jsme si

znovu a znovu připomínati, že máme co činiti s »primitivem«, s divochem, jehož kultura není o nic výše v měřítku civilisace, nežli kultura Papuů a Melaněsců vůbec, kteří nikterak svého »divošství« nezapírají.

Nevím, co náš policejní průvodce starému Ainovi sděloval, ale jeho chování stalo se ještě přívětivějším nežli dříve, několikrát zamával důstojně rukama, tak jako by chtěl naznačiti, že přivínuje nás k svému srdci a pak s velmi vážným a laskavým pohledem hladil si opětovně svou dlouhou bradu, čímž nám chtěl naznačiti své přátelství a úctu dle ainské zvyklosti. Provázel nás pak při procházce mezi domky a zavedl nás konečně s mnohým vítáním a hlazením brady do svého obydlí. Vstoupili jsme malou síňkou do místnosti s vyvýšenou podlahou jako v japonských domech, oddělené rohoží, kterou stařec držel odhrnutou, až jsme prošli. Uprostřed chaty je obdélníkové místo pro ohniště, které na všech stranách je obklopeno rohožemi, sloužícími k sedění. Nad ohništěm visí kotlík a nějaké nářadí. Od východní strany velké okno osvětluje v přilehlém rohu postavené poklady: vysoké leskle lakované nádoby, památné zbraně, různé ozdobné předměty pěkné japonské práce a vrbové pruty s věchty oloupané kůry, které mají velký posvátný význam. V koutech jsou zvýšené palandy, na nichž členové rodiny spějí, pečlivě prý rohožemi se cloníce proti těm, kdož snad ještě sedí kolem ohniště.

Starý Ainu posadil se se svou ženou, která za námi dovnitř vešla, na rohoží po japonském způsobu a oba dali se ofotografovati, tváříce se velmi důstojně. Bohužel, na fotografiích není dobře viděti modrého tetování na horním rtu u ženy, které vypadá jako silný knír a dodává tvářím celkem jemným a příjemným podivného rázu, který působí na nás jako znetvoření. Muže i ženu ofotografoval jsem pak ještě ve skupině venku.

Předměty japonského původu, které jsou chovány jako poklady ve veliké vážnosti, jsou namnoze památky velmi staré, pocházející z dob, kdy japonští lenní pánové udržovali dobré styky se kmeny Ainů na Hokkaidu a za poplatky, které jim tito v kožešinách a látkách z lýka zhotovených odevzdávali, odměňovali se výrobky japonského průmyslu. Namnoze jsou tyto kusy velkého stáří a opravdu značné ceny starožitnické, Ainové však jich nikomu prodati nechťejí, považující je za drahocenné památky po předcích, kteří byli v dobrých stycích s mocnými japonskými pány. Velkým hrdinou jejich tradic je japonský rek Jošitune, (na konci XII. století) bratr velikého šoguna Joritoma, který propadl hněvu a závisti svého bratra, přivlastnivšího si některá jeho vítězství, byl pronásledován jako psanec, unikl prý však na Jezo a žil mezi Ainy po řadu let. Podle tradic Ainů snažil se prý vštípit jim kulturu, učil je písmu a počítání, ale jeden z pozdějších japonských dobyvatelů jim zase knihy odňal a tak vše upadlo znovu v zapomenutí.

Na venek činí Ainové velmi příjemný čistotný dojem, nemají v sobě oné dotěrné zvědavosti, která u Japonců často překáží, výraz jejich tváře je klidný, ba melancholický, ale namnoze mnohem inteligentnější nežli u většiny Japonců, kteří jako by měli nasazenu masku úmyslně ztrnulou. Jejich látky hotovené dovedně z jemného lýka a barvené význačnými hnědými a modrými vzory, vypadají velmi čistě a také dlouhý vlas i vous mužů je tak upraven, že nechce se vám věřit, že máte před sebou lidi, kteří se snad nikdy nesvlékají a nekoupají.

Pro Japonce jsou Ainové příznakem chlupatých nečistých divochů, stejných s ježatými obry jejich pohádek, kterými straší děti. Pro Ainy bylo by velkým hříchem svlékati se v přítomnosti

jiných osob, kdežto Japonci, jak známo, vysvléknou se beze všeho studu do naha, mužové i ženy. Miss Isabella L. Bird, která navštívila vesnice Ainů již v roce 1878 a přinesla mnoho cenných záznamů o nich, vypravuje, že jistá Japonka pozvala zná mou sobě Ainku a dala jí připravit koupel. Ta však vlezla i do vody oděna, jelikož prý by nahotou svou urazila bohy.

Před každým oknem ční spodním koncem do stěny zastrčený prut s věchtem loupané kůry a pohlédnout! do domu oknem zvenku považuje se za velkou urážku. Pohostinnost Ainů je veliká a velmi taktní Miss Bird byla s Ainy po mnoho dní a chválí si jejich zdvořilost a zdrželivost nesmírně, jak u mužů, tak i u žen. Ovšem pro Evropany i pro Japonce je jídlo Ainů nepoživatelné, protože kotel, v němž se vaří a misky, z nichž se pojídá, nikdy nebývají kloudně vyčištěny, a proto veškeré jejich pokrmy vzbuzují ošklivost. Do kotle prý naházejí všechno možné dohromady spolu s ohavným zkaženým tukem, který v nich naprosto nevzbuzuje odporu, ač pro Evropana je úplně hnusný.

Viděli jsme pěkné medvědí kožešiny v domě, také lebky medvědí vyvěšené na kůlech při domech, ale dřevěná klec sestavená pevně z tenkých pňů stromových, v níž býval chován medvěd, byla patrně již dlouho prázdná. Vrba z říše rostlinné a medvěd z říše živočišné mají největší úlohu v náboženských úkonech a zkazkách Ainů. S oběma je spojen pojem vysokého božství. Na neštěstí hlavním a skoro jediným způsobem, jak uctívat! božstva, je pití sake, kterému Ainové již odedávna propadají až v žalostné míře. Zdá se opravdu, že tento nešťastný kult odůvodňující vášnivě pijanství, má mnoho viny na úpadku Ainů, kteří vskutku propijí vše, co vydělají a nezdají se miti smyslu pro nic jiného.

Do nedávna ve všech ainských vesnicích býval chován medvěd, chycený ještě jako štěně, býval odkojen ženami, pak zavřen v kleci až dorostl, a na konec při veliké slavnosti k smrti umučen s mnohými obřady. Maso jeho bylo rozděleno účastníkům k snědku a lebce vzdávána božská úcta.

Mužové, až na jediného starce, který nás provázel, byli mimo vesnici, patrně v lese na lovu, nebo rybařili a vozili dříví po řece. Žen a dětí viděli jsme dosti značný počet. K naší lítosti děti se tuze vrtěly, když jsem je s matkami fotografoval a tak obrázky se zkazily. Ani stařec, ani ženy, které jsem fotografoval, nechtěly ničeho přijmouti za odměnu, jen maličkým bylo dovoleno vzít si pamlsky, které jsme jim koupili u Japonce, který postavil svůj dům a krám uprostřed ainské vesnice a byl ožen s Ainkou.

Vzhůru do stráně, porostlé mladým listnatým lesem, vede cesta opatřená dřevěnými stupni, prochází se na ni posvátnou branou »torii« a nahoře v lese je malá svatyně, kde vedle oficiálního kultu šintojského i staré rity ainské se uplatňují. Nedaleko pod vesnicí teče široká blátivá řeka, po níž dříví se spouští z lesů v jejím vrchovišti a chytá u Sarufuta. Nad Piratori odbočuje od ní široký kanál zavodňovací, který je připraven, aby japonským zemědělcům umožnil vzdělávání půdy na terasách údolí. Pro Ainy toto zařízení dosud nemá smyslu, jejich ženy zpracují malá políčka nejvýš primitivně, sotva je pohnou, ani jich neplejí a mívají jen velmi chabou sklizeň prorostlou býlím a plevellem všeho druhu; pěstují hlavně proso, fazole, brambory a různou zeleninu.

Zdá se, že velmi málo se v životě Ainů zdejších změnilo za skoro celé půlstoletí od návštěvy Miss Bird; reverend Batchelor je tu všude ctěn jako velký dobrodinec a přítel, ale na hospodářské povznesení domorodců měly jeho snahy dosud velmi málo vlivu, ač spolu s ním japonská vláda

přičiňuje se všemožně, aby početný i morální úpadek Ainů zastavila.

Opravdu se sebezapřením loučili jsme se s vesnicí Ainů a s krajem, který přímo zval k dobrodružným toulkám v době, kdy nejpěknější jarní doba se otvírala. Bohužel, neměli jsme více času, neboť bylo nám nastoupiti zpáteční cestu ještě toho dopoledne, abychom si prohlédli mezi dvěma vlaky Širaoi a dorazili na nocleh do Noboribetsu.

Za ponurého dne vraceli jsme se vlakem do Sarufuta a tam přesedli na trať do Tomakomai. V tomto místě byla úřední honorace zase pohotově a dva z pánů nás provázejících, školní inspektor a přednosta stanice nabídli nám, že pojedou s námi do Širaoi, vesnice rybářských Ainů, dvě stanice od Tomakomai směrem k Muroranu.

Širaoi skládá se ze dvou osad, u nádraží je japonské městečko, opodál pak směrem k mořskému břehu leží hodně řídké stavěná vesnice Ainů. Ze stanice železniční je velmi pěkný pohled na mohutnou sopku Tarumae nebo Tarumai, která je skoro stále v činnosti a vždy za čas pokryje širé okolí mocným povlakem popele při erupcích zvláště silných. Je to dvojitý kužel, prostřední, užší a vyšší, vyrůstající ze spodního, jehož boky jsou za rostlé mocnými temnými pralesy, občas mohutný peň dýmu vyráží z kráteru a pomalu se rozptyluje rozháněn na různé strany protichůdnými větry v jednotlivých polohách vzdušných.

Do vesnice Ainů byl vůdcem naším školní inspektor, který ovládal jazyk domorodců do té míry, že mohl se s nimi dorozuměti. Nejdříve ukázal nám k velké chýši, kterou obýval starý náčelník, jehož vyvolal ven a přemluvil po dosti dlouhé pozdravné ceremonii, aby oblékl se do svého slavnostního roucha. Nás požádal anglicky, abychom náčelníka odměnili jedním jenem za výkony, které nám ukáže.

Za chvíli objevil se stařec před chýší v plné parádě, vyhlížeje jako nějaký vysoký duchovní hodnostář některé orientální církve. Měl na hlavě červený barek na dlouhých prošedivělých vlasech, dlouhá, bílá, místy do žlutává zbarvená brada sáhala mu na cihlově červený plášť, který zakrýval skoro až ke kolenům obyčejné kimono ainské, zdobené hnědými a modrými ornamenty. V ruce držel mohutný luk a dal se bez obtíží ofotografovati. Pěkná jinak tvář jevila pouze stopy pijanství a skutečně, jak nám náš tlumočník sdělil, »sake« bylo hlavní touhou tohoto velebně vypadajícího starce, který proti dávným zvykům Ainů rád přijímal dary a proměňoval je v sake, jež popíjel k počtě bohů.

Na jeho vyzvání vešli jsme do prostranné chaty, která byla podobně zařízena jako ona, kterou jsme viděli v Piratori, jenom v koutě vyhrazeném pro poklady byla mnohem bohatší a také více vrbových věchtů viselo tu na různých stranách.

Se zjevnou pýchou ukazoval nám starý náčelník některé vskutku krásné a starobylé meče japonské i nádoby bezvadně lakované. Potom usadil se v čelo ohniště a znázornil nám obřad obětování a pití sake. Vzal objemnou hlubokou lakovou misku, vyzval nás, abychom si mysleli, že je plna sake, postavil ji před sebe, ukláněl se, mával uctivě rukama a hladil si bradu, pak vzal do ruky pečlivě hlazené a vyřezávané ploché dřevo, vypadající jako pravítko, pozvedl levou rukou misku a dřevem vážně a obřadně pohyboval, jakoby uléval oběti bohům, pak potahal si znovu bradu, pravítkem pozdvihl mohutné kníry a dlouhým tahem obracel misku až skoro do převislé polohy znázorňuje, jak pobožně a důkladně se má sake pít.

Dali jsme mu větší odměnu nežli očekával, neboť velmi ochotně ukazoval nám ještě věchty, kožešinu medvědí i lebku tohoto dravce, vystavenou na kolu stranou chaty a loučil se s námi velice přívětivě mávaje rukama a hladě si svou důstojnou bradu.

Ostatní domky v ainském Širaoi byly rozměry menší, nežli chata náčelníkova a také v koutě pokladům vyhrazeném bylo jen málo cenných předmětů. Zase jsme neviděli ve vesnici mužských, byli na moři za lovem ryb. Vyšli jsme až ke břehu za vesnici, kde rozestavena byla vysoká a lehká bradla na sítě a zaraženy mocné kolíky, k nimž připoutávají se na břeh vytažené čluny, aby zvednuté a rozvlněné moře jich neodneslo, když rozlévá se daleko na břeh. Tísňivý dojem pustoty nás svíral na tomto plochem pustém břehu, když hleděli jsme do šedivých zkalených vln a hledali v dále tmavé body, čluny s Ainy lovicími ryby sítěmi.

Podivný, smutný a přece krásný je tento kraj Ainů, prostý ve své divokosti mezi pralesy, sopkami a chmurným kalným mořem.

Překvapující scénu jsme zažili, když vraceli jsme se kolem právě dostavované chaty, před níž čtyři ženy byly zaměstnány rovnáním, barvením a svazováním rákosu, určeného k výzdobě stěn. Byly to vesměs mladé osoby, ani jedna z nich nebyla tetována a jejich kulaté tváře začervenale od slunce i pilné práce připomínaly na slovenské selky.

Chtěl jsem je ofotografovati, ale setkal jsem se s velmi rozhodnými protesty. Náš japonský průvodce přispěchal a vyjednával s nimi chvíli, jsa patrně velmi znepokojen jejich výmluvnými vyřídkami. Teprve na opětovný dotaz mi sdělil s velkými oklikami, že tyto mladé ženy jsou již velmi zkažené a nestydaté a že chtějí, abych každé dal za postání ke snímku celý jen.

Vzkázal jsem jim, že nedám více nežli jeden »jen« všem dohromady, ač milý inspektor i tuto nabídku považoval za přílišnou. Ještě chvíli ulevovaly si velmi výmluvně, pak ale se postavily před chatu, když jsem vtiskl inspektorovi do ruky minci a ukázal jim velmi názorně, že odejdu, nebudou-li spokojeny s touto odměnou.

Bohužel, jak se stává někdy v takových případech, snímek se nepovedl k mé velké zlosti, přeexponoval jsem ho.

Inspektor nám vypravoval, že děti Ainů se velmi dobře učí ve škole, chválil jejich vzorné a mírné chování i dobrotu povahy, bouřil však zle na zakořeněný alkoholismus, jemuž skoro všichni dospělí, muži i ženy, podléhají v míře vsutku zhoubné a znemožňující jakýkoliv pokrok.

Různé staré své zvyklosti Ainové odkládají, tak na příklad tetování již u mladších žen bývá zanedbáváno, ale alkoholický kult bohů nedovede vy kořeniti nikdo, ač jsou i mezi Ainy jednotlivci, kteří sake nepijí a jeho zhoubnost uznávají.

Ainové stále a poněmhu vymírají a mísí se s Japonci. V Širaoi je dosti značný počet Japonců, kteří si vzali za ženy Ainky a tyto považují to za čest, mohou-li se provdati za Japonce. Zdali pak odloží také svůj odpor k vodě a svlékají se do koupele, zapomněl jsem se, bohužel, zeptati.

Ainové, jak se dosud zachovali, zůstávají v hlavních rysech nedotčeni japonskou civilizací a jsou stejně primitivními rybáři a lovci, jako byli v šerém dávnověku, ještě dříve, nežli do jejich sousedství vnikli záhadní hotovitelé primitivních, ale velikých nádob z hlíny, jejichž hojné zbytky se zachovaly na Hondu, ale dosud nejsou vědecky přesněji uvedeny v soustavu.

Je to věru s podivem, že tisíciletý, často bezprostřední a zde na Hokkaidu po dlouhé doby

celkem přátelský styk s národem o tolik pokročilejším, jako jsou Japonci, měl na Ainy tak nepatrný vliv.

Příčinou toho nemůže být ani nedostatek přirozené inteligence. Třebaže jsou Ainové jedním z nejzaostalejších plemen lidských, nečiní naprosto dojem divochů. Antropologické bádání dokazuje, že tvarem lebky i velikostí mozku velmi prospěšně se liší od jiných primitivních plemen. Jejich tvář, zvyklosti a společenské mravy ukazují na značnou přirozenou inteligenci.

Mnohé jejich znaky tělesné podporují domněnku, že Ainové jsou dosti úzce příbuzní s předky našeho bílého plemene. Rozhodně jsou nám mnohem bližší nežli Japonci a většina příslušníků takzvaného žlutého plemene.

Jest dosud nevysvětlitelné, jak se stalo, že Japonci vypudili z těchto svých odvěkých, kdysi sverepých odpůrců, veškeru zpuřenost a bojovnost. Dnešní Ainové jsou osudu odevzdání, mírní trpitelé, kteří do té míry Japonců se bojí, že žádných stížností proti nim ani k osvědčeným přátelům nevznášejí, při tom však velmi málo s nimi se stýkají a z jejich vymožeností pramálo přijímají.

V posledním půlstoletí nečiní Japonci Ainům zjevných příkoří, nechávají je žít po starodávném způsobu v jejich vesnicích, povolují a uznávají jejich kmenovou samosprávu, ba ochotně dávají misionářům křesťanským i jiným bělochům příležitost, aby se s nimi stýkali. Uznali reverenda Batchelora jako ochránce Ainů a řídí se jeho radami, neboť porozuměli, že bylo by kulturní škodou, nechati vyhynouti úplně plémě tak zajímavé a politicky naprosto neškodné.

Jen omezování svých starých práv na volný lov zvěře Ainové těžce nesou; japonská kolonisace a těžení dříví z pralesů zasahují stále hlouběji i do oblastí do nedávna jen Ainům známých. Nařízení vládní značně zúžila loviště, v nichž se Ainové mohou volně pohybovat. Také lov otrávenými šípy ze samostřilů i do vlčích jam je zakázán s ohledem na dřevaře lesy se toulající a tak nejmilejší sport Ainů, lov na divokou zvěř a zvláště na medvědy, je zbaven svého pradávného rázu.

Výrobky Ainů ze dřeva, z kostí, z lýka, z koží a kožešin připomínají též po stránce ornamentální velmi silně na kulturu tak zvaných kolumbijských Indiánů na severozápadním pobřeží Ameriky i na přilehlých ostrovech a mají mnoho společného s pracemi Polynésců, jsou však méně rozmanité a výrazné.

Také jejich společenské zřízení bylo zaostalé proti oběma, nikdy nedovedli se spojovat ve větší celky, neměli vůdcovských charakterů a scházela jim veškerá organizace pro vydatnější součinnost ať při honbě a rybolovu, ať ve válce. Osobně vynikali a vynikají silou a statečností, která až překvapuje u národa, jehož způsoby jsou jinak tak mírné a nevýbojné.

Vedle pití sake naučili se Ainové od Japonců též kouření z dýmek a nejnověji i cigaret. Sušené a uzené ryby, uzená zvěřina, zvláště medvědí a srnčí, fazole, proso, brambory, zelenina a různé dary moře, jako korýši, měkkýši a jedlé chaluhy jsou hlavními potravinami Ainů. Ženy jejich jsou pilné pracovnice; jejich úkolem je péče o pole, která ovšem je velmi primitivní, hotoví však velmi pěkné a trvanlivé látky z lýka, vaří a vykonávají domácí práce.

Zpravidla nesmějí se ženy ani účastníci obřadů bohoslužebných a porad kmenových a mají postavení hodně podřízené, jen řídkou výjimkou nabývají některé vlivného hlasu v poradách mužů.

Zato mládež má prý dosti svobodnou volbu svého druhu do manželství a ženy Ainů jsou vesměs chváleny pro velmi početný život.

U kmenů, jejichž zbytky jsme poznali, bylo mnohoženství jen výjimkou, náčelníci měli někdy dvě nebo i tři ženy, jinak však brali si mužové druhou ženu jen, byla-li první bezdětná.

U jiných, zejména loveckých Ainů, bylo mnohoženství oblíbeno z toho důvodu, že lovec, toulající se různými směry pralesem, na několika místech založil si domácnosti, aby si byl jist útlukem na svých výpravách. Mezi ženami jednoho muže nebylo soupeřství, chovaly se k sobě velmi přátelsky, sešly-li se dohromady.

Byli jsme dojati svými, bohužel, jen příliš letnými návštěvami ve vesnicích Ainů. Je to lid velice sympatický. Měkké jejich rysy naprosto nejsou mongolské, nejvíce připomínají ruské mužíky a věru Tolstoj sotva by kde byl našel do osudu odevzdanějších žáků svých trpných zásad. Smutni jsme odjížděli z kraje Ainů, neboť osud tohoto zajímavého plemene je zpečetěn a v několika generacích bude veta po jeho svérázu.

Za jejich vymírání v posledních desíletích nelze činiti zodpovědnými Japonce. Je to, žel bohu, přirozený světa běh, že duch méně schopný pro boj o život podléhá, krní a vymírá. Tak je tomu i v tomto případě. Ainů ubývá silně i v posledních letech, je prý čistokrevných již sotva patnáct tisíc na celém Jezu.

参考文献

Daneš, J. V. 1926. XXVII MEZI AINY. Tři léta při Tichém oceáně, Díl II. Prague: Fr. Borový. p. 497–516. Available at: <https://kramerius5.nkp.cz/uuid/uuid:29b303e0-2a56-11e5-8454-005056825209>

